

## Interview mit TN27 (11.07.2017)

Q : 最初の質問なんですけれども、教え始めたのはいつでしたっけ？

A : えっと 2006 年 10 月です。

Q : 2006 年 10 月に、非常勤講師をはじめられた。

A : はい。まだ D 3 かな。

Q : あ、ドクターの三年の頃ですね。

A : はい。

Q : で教え始める、教えよう、まドイツ語を教えようと思ったきっかけとか、まあもちろんお話があったってこともあると思うんですけど、教師になったきっかけっていうのについてお話しいただけますか。

A : はい。きっかけは今先生おっしゃったように、話が来たからというのが一番大きくて、あの当時わたし 2004 年から、2004 年 10 月から 2 年間留学をしてまして、えっと 9 月の初めか 8 月の、2006 年の 8 月の終わりか 9 月のあたまかちょっと忘れましたが、その頃にまあ留学を終えて帰ってきたところで、で、あの、まあこれからまた日本の生活にゆっくり馴染んでいこうかと思ってたところに先方からまあ電話がかかってくるまで、で、あのちょっと来てほしいんですけどと言われてもう訳も分からず、で指導教官の先生と相談して、まあ受けたら？ということで、というのが一番の…。なので、あまり自分でこう、その時はまだ全然博論、だから D 3 といってもまだ D 1 で休学して行ったので、要はまだ D 1 の残りを 1 年やらないといけない D 3 だったので、自分がそんなまだ授業をするっていうのが自分の問題、自分のことだっていう実感がないまま始まってしまったというのが一番正直なところなんです。ただ、まあ研究室の先輩達は皆さんあの、まあ非常勤講師をされて生活されてる方が多かったので、自分もここでまあ、先のことであるとはしても、博論書いて残っていくんだったら、いつかはこれをやるんだろうなと思っては、漠然とした気持ちはあったんですけども、まさかこんなに早く来るとはというか、このタイミングで来るとはということで、うん、という感じ。

Q : なるほど。ああ、じゃあ、かなり、突然ふってわいたように。

A : そうですね。そうです。

Q : そうだったんですね？で、最初教え始めた頃の経験についてお伺いしたいんですけど、こう、どんなところが割と自分としては、ああ向いてるなとか、比較的簡単にできるなと思って、どんなところが難しいなっていうふうに思いましたか？当時。

A : すみません、これもう十年後の自分から振り返ってなので、その時の自分が聞いたら全然違うこと言ってると思うかもしれないのですが、

Q : はい、はい当時。

A : えーと、ちょっと今から思い出してみると、えーと、うまく比較的うまくいきやすい

というのは、えーと、まあ女子大だったのですね。で、わたしも十年前なのでそれなりに学生に歳が近くて、で、えーとまあ、なんて言うのかな、割とその、なんだ話がしやすいというか、向こうから、こうなつてくれるの、なつてくれるって失礼な言い方ですけど、関係は作りやすいというのは思いました。で、どうしてそれが自分が相対的に若くて女性だからかなと思ったかという、当時、わたしがそこに着任というか非常勤で行くようになったきっかけっていうのが、その、えっとそこまですっとドイツ語を教えてらした先生が、割と年配で男性の先生で、で、まあ学生の感想からすると、まあそれなりにちょっと話しにくいとか怖いとか、で、いわゆるまあ、ごめんなさいその方の悪口になってしまうんですけど、まあスパルタだとかっていうので、なかなか大変なところもあったので、でもまあ、あの今は楽しいからという言ってくれる人がまあいて、独検もその大学はそういうの受ける人もまあいなかったんですけど、受けに行っても実際受かる人も出てきたりしたんで、まあそこは、受かるようにもって行けた、という意味ではなくて、わたしを信用してくれる人がまあできたというので、まあ関係を作るのが、まあ、っていうのは割と年齢と性別が幸いしたかな、っていう風に思っています。で、難しいなと思ったのは、うーんやはりなんか、自分の中の先生像みたいなのがそれこそたぶんあって、これをさらわないとだめとか、やらせないとだめだとか、これができないとだめだというのが多分その時はまだすごくあって、うまく行かないと自分にも苛立つし、あとはその授業をその90分その何かなんでもちゃんと座って、黙って聞いているといった、当たり前どころではなかったもので、たとえば教室入ってたら、いつまでもアイスクリーム食べて雑誌めくっているような人もいて、そういうことに、今となってはまあそういうことはさておいて、と思えるんですけど、当時はもう、授業をちゃんとしなきゃいけない、じゃあちゃんとした授業って何なんだっていうのはまた別の問題であるにしても、うーんなんかちょっとそこで、すみません、授業の内容というよりもそこで自分が立ち振る舞いがなかなかなかったなという感じかな。その時だからそれこそ名前出してちょっとあれですけど\*\*さんとかに相談して、で\*\*さんは「でもまあ学生とバトルになってもねえ」みたいなことを\*\*さん言っていて、で、やっぱり何年かやるとそういう風に思えるようになるのかな、でもわたしはいちいち、けっこうキツてなってしまうっていうので、結構苦しんでた気がします。

Q：ああ。大変だったですね。

A：すみません、あまりドイツ語の話ではなくなってしまったんですが。

Q：いえいえ。で、その頃、博論も書いている真っ最中だったんですよね？

A：真っ最中か、まあ序盤です。

Q：序盤。

A：正直なところ言えば。

Q：ああ、なるほど。で、その研究活動と、教師としての仕事との両立の関係については、

どう感じてましたか？

A：当時は、当時はまだコマ数も少なかったの、うーんとまあ、それによって恒常的にああこれなければ論文書けるのに、というのはなかったかもしれませんが、あの、例えばあの\*\*文学ゼミとか行事とか重なったりしたら、あと発表が近い時に、今までだったらあと三日あると思えるところが、でも何曜と何曜が授業だから実質何日だ？と数えるようになって、ああ時間って減ってくんだなというのではプレッシャーに感じることはありましたが、でも今みたいな風に全然できなくなってくというような、そこまではまだ一年目はまだなかったと思います。数年やってコマ数が十コマくらいに増えた時に、2かける五日か、休みがあつて他は授業で埋まっていると、今にして思えば、半日空いてるんだったらいいじゃないって思うのはあるにしても、その一週間、授業が入ってない日がなくなるっていうのは、やあ、きついなっていう。時間がなくなってくっていうのは、博論出す時期に近づいているので、今のタイミングでこうやって増えていくっていうのはつらいなっていうのはありました。ただ、先輩たちはもっともっとコマ数やっていたので、いや自分は少ない方だからと、思って、で運よく遠いところの勤務もわたしはなかったの、なんでまあきついで、まあなんとかできる範囲かなと思うようにはしていました。

Q：うん、ああそうだったんですね。それでえっと、教員養成講座に最初に来たのがいつでしたっけ？

A：えっと2011年の10月からだと思います。

Q：ああ。教え始めて五年目ってということですね？

A：はい。

Q：そのきっかけは何でしたか？参加しようって思ったのは。

A：きっかけは\*\*先生…。

Q：あつとどこであれでしたっけ？

A：えーと、あの頃ちょうど8月か9月、8月だったかな、に博論のえつとりあえずその論文の書いたものの提出までが終わったタイミングで、で\*\*先生から「こういう講座があるからよかったら」というメールを頂いて、その時わたしその時まで、結局そういう勉強を一切したことがなかったので、授業が、自分の受けた授業の再生、コピーしかできないという感じで、コピーしかできないという参照点が自分が受けた授業しかなかったの、結局そのコピー以外のことができず、で複製は劣化するの法則で、わたしはこれができないのはひょっとして、結局手詰まり感がすごく強かった時期でもあるので、じゃあちよつと受けてみようと思って受けました。でそれまでにも、先生、あのご自身で\*\*大学でされている授業に来てもいいよって言ってくださったりとか、ずっと声を掛けてくださっていて、どっかで勉強はしなきゃ勉強はしなきゃっていうのがずっとあつて、ただ博論があるって理由でやっていなかったの、すごく良いタイミングでお誘い頂いたの、受けました。

Q：なるほど。で、そのコピーっていうのは昔自分が受けた、学部の頃自分が受けた授業と同じように昔はやってたっていうこと？

A：うーん学部で受けた授業の具体的にかどうかはわかりませんし、その受けたすべての授業に関してコピーしたいというよりは、これはやらない方がいいっていうのもあったので、全部というわけではないんですけど、たぶん学部の授業だけじゃなくてこれまで受けてた英語の授業とかも含めて、授業って、外国語の授業ってこういう感じっていうのを、やってしまってたかなっていう気がします。

Q：それって簡単に言うとどんなタイプの授業なの？

A：なんだろう、そのあまり先生が教えないと新しいことはやれないから、やれないし学生も教えられてないこと聞かれると機嫌が悪くなるとか、そういうイメージなので、で、それってあの原則的にはこちらが伝えてないことに関して回答が得られないことに関してはその通りだと思うし、試験で今まで触れてもいないことを問うたりしちゃいけないっていう意味ではそうなんですけど、わたしこれ最近どこかでも言ったかもしれない、あのエサをどうやって食べさせてあげよう、どんなエサをどうやって食べさせてあげようばかり考えていて、エサの取り方を、こうやったら取れるよ、でもこれ唯一じゃなくて、これが肝だけど、これが実現できればどんな取り方でもいいよっていう感じの教え方は多分できてなかった。でこちらでだから準備しすぎてしまう。もちろん自分としては、自分がメインでしゃべる授業はしても仕方ないってわかっているのに、うっかり説明しすぎてしまうとか、グループワークをさせるためのお膳立てがこれやったら意味ないよねってくらい準備しちゃうとか、プリントがやたら作りすぎてしまうとか。物理的な準備がいっぱいしてしまっただけで、学生に任せる部分が少なくなってしまう。

Q：なるほど。で、講座に参加されるにあたって、こうどんなことを期待されていましたか？

A：ああ、期待…？

Q：こういうことが勉強できるかな、とか。

A：なんかそういうことも具体的に思い浮かばないくらい、あの授業あまり考えずに、考えずについてというのは、一個一個の授業のことはちゃんと考えてるんですけど、先のコンセプトなくたぶん授業してたと思うので、何があのできるようになりたいですかって言われても、え、プリントの作り方やあいしな…みたいな感じが多分一番あったんじゃないかと思います。ただ講座の *Beschreibung* で科学的な知見を身につけて、専任職になったらというか、しかるべき立場になった時に責任のある発言ができるようになるっていうのを読んで、それは非常に知りたいというか、自分がそういう立場になるかどうかは別として、科学的というか客観的というか、そのある蓄積に基づいて言われていることとか、それに基づいて責任あるっていうのはこの表を埋めましょうっていう表を作るとかっていうのは全然違うところで責任があるっていうのはどう

いうことか、っていうのはなんか知れたらいいなっていうのはありました。

Q：で、そういった、そこらへんの期待は満たされましたか？

A：はい。はいっていうか、満たされた割にはこの発言しかできていないのかと言われてれば厳しいのであるのですが、えーっとなんか、うんそうですね、なんて言ったらいいのかな。なんかその遡らないと授業の組み立てってできないっていうのを講座では一番よく分かったというか、勉強になったことで、非常勤の時は、目の前の授業は、明日助動詞だ、何やろうどうやってやろう、教科書はこうやって書いてある、だったんですけど、だけど助動詞が使えるっていうのはどういうことなのか、あとはその、なんだろうな、例えばあの、CEFRとかもわたしは参加するまでは知らなかったのでも今にして思えば恐ろしいことなんですけど、知らなかったのでも、例えば kannst が kann とか kannt と書いてあるからといって、A1 だったらそれってコミュニケーションがとれていれば、そこをそれほど問題にしなくてもいいとかっていう発想をできなかったのでも、ごめんなさい話が今どこに飛んでしまって…ええと、あそうだそうだ責任ある発言ができるようになるっていう期待に対して、満たされたかっていうことですよ。自分が責任ある発言ができるようになるまでには、もちろんその大学の中の立場とか、そういうこともあるので今すぐできるとかいうことではないですけども、でもどういう観点からドイツ語というか外国語学習を考えないといけないかということに対しての視点は増えたというか、たくさん学べたので、だから例えば、助動詞ができるというのは一年間の目標に照らしてどうなのかとか、じゃあその中で助動詞ができるようになったといえるのはどんな状態で、そこに向かってどんな練習をしたらいいのか、どんなタスクをしたらいいのかっていうのもそうだし、もうちょっとその大学の中で外国語ってどういう位置づけにあるのかっていうか、そもそも位置づけができるような状態にあるのかないのかって考えると、じゃあ大学でそれやろうと思ったら、じゃあ日本全体っていうか、もっと上位だったらどうなのかっていうことを考えなきゃいけない、ということが学べたので、そこはその責任ある発言に近づくのに大いに…まあ実際できるようになるにはまだ時間があるんですけど。

Q：はい、なるほど。

A：一つ一つの回答が長すぎてごめんなさい。

Q：いや全然。あのなんでも話して頂いて結構です。じゃあ教え始めた最初の頃と比べて、教員養成講座を受けたり経験を積んだりして、教師としての今のご自分をどのように評価なさいますか？

A：すごく変わったと思う点は、授業の準備の仕方がすごく変わりました。つまりさっき言ったように、例えば助動詞だったらこの変化を覚えてもらわないといけないから、この変化を覚えるためのプリントを作ろうみたいなことをしてたんですけど、どうせ教科書持ってるんだしいじゃないとか、物理的な準備とか学生にそのなんだろう、こちらから与えるっていう形ではなくて、教科書はこれが指定されました、明日はこれ

がテーマです、じゃあこれどうやってわたしがプレゼンしたらというか、補助線引いたら学生が、わあ、これそうだそういうことやってみようってなるかなっていう、課題とかテーマの提示の仕方をすごく考えるようになりましたけど、それはパソコン向かってスライド作ったりとかプリント作ったりということではなくて、お風呂入ってるとき急に思い浮かんだりすることもあるし、提示の仕方がすごく変わったのと、例文とかも自分であまり用意していかないで、例えば英語でこういうことどうやって言える？とか、日本語文法でこういうの使っている例くださいとか、って言って、ドイツ語で使えそうなのが出てくるので、学生にいっぱいしゃべってもらってというか、というふうに変ったので、準備は相対的に楽になりました。

Q：ああ楽になりました。

A：楽になりました。でなんかやっぱり学生に任せて授業を運ぶと自分は楽できるし、学生はしゃべったり考えたりキャッキヤしながらやってくれるし、その方がっていうか、今のところは授業評価アンケートとかにも良かったって書いてくれてるので、とりあえずうまく運んでいるので、そこが大きいかな。なんで\*\*先生が授業したりしている映像とか写真を見たりすると、\*\*先生の独壇場みたいな感じは全然なくて、\*\*先生は見て回ってるだけで、あとは\*\*先生に授業見に来ていただいたときに、もっと学生に投げていいってことを言われたのもあって、それも大きいかな。やっぱり一回見に来ていただいたのも大きかったと思う。

Q：ああなるほど。昔よりうまくできるようになった点というのはありますか？

A：うまくできるようになったのは、何が起きてもあまり動じなくなったので、それもあるって学生にいっぱい投げられるようになった。昔は欲しい答えがこなかったら展開させられないから、投げられないって思ってたんですけど、合わないの来たって、別に合わないなら合わないの全然使い方はいくらでもあるし、ダメとかじゃ全然ないから。あとは学生が割と正しい球しか投げたくないっていう人が多くいるので、どこ投げても取りに行ってもあげるからどこでもいいからとにかく投げてっていうのができないと、それこそ、何々、**Apfel ist teuer.**で、ここ **der** 以外入れるのがない状況でしか練習できなくなってくたので、そこをどうしたらいいかな、っていう問題もあったのですが、まあ、アドリブでもなんとかなると思えるようになった。カッコそれが現実かどうかは検証の余地ありという感じですが。

Q：ああなるほど。こんな点については、これからもっと伸ばしたいとか、そういうのはありますか？

A：うーんと、教材との付き合い方と、あとはテスト、試験問題の作り方。あと、そうですね、**Übung** とかドリルと、タスクの兼ね合いとか、かな。

Q：兼ね合いってというのは、どういう意味ですか？

A：えっと、わたしはそのカッコを埋める練習は自分でもできるからと思って、あんまり授業の中でやらせるっていうか、それで最後だよ、これができたらこれを覚えて来れ

ばいいからねっていう意味ではやりたくないんですけども、ただ例えば今日授業を欠席します、こういう事情で欠席しなければなりません、ごめんなさい、ってメールを書くまでの過程ではこれをやった方が学生が最後の目標に達成しやすいのであればやった方がいいと思うのですが、そこをやっていると時間が足りなくなってしまうとか、全体通してどっかで帳尻が合えばいいんですけども、なかなか時間との闘いのなかで、どんなタスクをどのくらいやらせるかっていうのが結構難しいというか、やっぱりアドリブでいく部分が増えると、学生もいろいろ出てくると時間はやっぱりかかるので、これがノルマだよっていうのが決まってるって悩ましいところはあるので、その辺をどういうふうにして、なのでこれはタスクとドリルの話だけではなくて、全体の運び方というか、思わぬところで時間かかるけど、でもこれはかけさせたいというところもあるので、結構やってみて、あ、これこんなに時間要らなかったとか、要ったなということもあるので、あんまりわたしが決めた通りに運べるようになりたいという意味ではないんですけど、時間も限られていることですので、ちょっとそこがあまり上手にできていないかな、と。

Q : じゃあその、ご自分で感じてらっしゃる、もっと伸ばしたいところっていうのを伸ばすためには、具体的にどんなことをしようっていうものがあるかとか、あるいはそれについては良くするために養成講座でヒントは何か得られたりとかしましたか？

A : ヒントはたぶんあのやっぱり、授業のプランニングをああやって表でちゃんと書いたことは、それまで多分なかったんで、あれを今は簡単にしか書いてなくて、最初 30分でこれとこれ、次の 30分でちょっと作業して、盛り上がってください、最後はちょっとこういうことやる、ぐらいい大雑把にしか作ってなくて、実際にやるときはその分刻みに作ったスケジュール通りにやらなくてもいいかもしれないですけど、自分でもうちょっとやること明確化させると、そのやるときにブレなくていいかなと思ったりします。なんか今日もちょっとそれで、ああ失敗したと思ったことがあって、これで最初まあウォーミングアップできるでしょと思ったら意外とうまくいかなくて、でそれも多分いま言ったことなんですけど、ほんとにこれをやるの何分かけてやるの？なんでこれやるの？っていうのもっとはっきりさせてたら、わたしのキューの出し方とかもきつと変わったらだろうなっていうのは毎回の反省ですけど。なので、準備楽になったのはいいんですけど、ちょっと楽（らく）しすぎてるかなってちょっと、いま言いながら思い始めました。

Q : 最後に二つ質問があるんですけど、わたしのイメージする良い授業とか、こういう授業ができるようになりたいっていうの。まあ今の質問とかぶってるかもしれないけど。

A : こういう授業…ああ難しいな。受けている間に、例えば今日助動詞やって、助動詞面白かったなっていうのもいいんですけども、やってる間はまあ…こんな授業っていうのに合うのかどうかわかりませんが、わたしが自分で大事だなと思ってるのは、試験で、授業でやったこととか、あるいは授業以外で勉強したことが試験で賞味期限

が切れるようではいけないというか、少なくとももったいないんで、たとえばドイツ語で授業を受けたら、つぎ英語苦手だったけど、ちょっとここやってみようってなったりとか、ドイツ語やってちょっと元気になったからこれやってみようとか、いろんなことにつながるとか、卒業してから、ドイツ語の知見でもいいですしドイツ語、外国語を勉強した経験でもいいし、その授業でほかの人と一緒に作業したっていうことでもいいんですけど、卒業後になんかこういうことだったかなっていうふうに、どこか先々とか、別なことに結びついてほしいなというのが、常々ありまして。そんな授業ってどんな授業？って言われたら非常に難しいんですけど。でもだから、文法一つとっても、例えば können はこう人称変化するから覚えてね、じゃなくて、英語はないのにドイツ語は…とかいう話が絶対出てくるので、ちょっと待てと。英語はこうだったよ、ラテン語はこうだったからこうだよとかいうと学生は覚えるのは大変だけど、理由のあることなんだとか、なんでルールが減っていったかとかいう話をするとかちょっと腑に落ちたりするので、そういうもうちょっと長いコンテキストで見えて得るところが多い授業ができればいいなと。すみません、すごく漠然とした…。

Q : いえいえ。なるほど。あと最後の質問はですね、理想の教師像とか、自分としてはこういう教師でありたいというような、将来。

A : 大学で教員続けるとしたら、学生がちゃんと自分よりもできるようになってもらうっていうことを、ちゃんと目標にできることと、そのために何をしたらいいかっていうのをちゃんと考えられる教員かな。なんかさっきのエサの話じゃないですけど、エサ食べさせてばかりだったら、自分の食べたエサしか学生は食べないですよ。エサ取りに行ったら、私よりもいいエサを取って来れるかもしれない。わたしよりもいいエサ食べて、もっといい栄養とれるっていうふうになって貰いたいっていうか、なんか綺麗ごとを言っているみたいなのですが、それをやらないと、ドイツ語できる人っていうのは多分どんどん減ってってしまうので、自分よりも、で、現実にはみんながドイツ語を専門にするわけではないので、現実にはみんながわたしよりも、わたしよりもっていう言い方すごくダメだ…教員の運用能力に比してもっとできるようになる人がどのくらい出てくるかっていうのは別としても、そこに対して授業を組み立てていきたいなっていうのと、あとは、それは学生に対してはそうっていうのと、大学で仕事を続けるとしたら、大学の中で、ドイツ語、外国語教育なり外国語学習っていうのがどういうふうに大事で、どういうふうに大学の中で位置していかなければいけないのかっていうのを、きちんと言えるようになりたいと思いました。

Q ; ああなるほど。どうもありがとうございます。ぼくから用意した質問は以上なんですけど、教師としての自己像の発展っていう観点から、それについては聞かれてないけどこれは言っておきたいってことがあれば。もしなければいいですが。

A : 今は大丈夫ですが、あとから出てくるかもしれないです。

Q : なにかあればいつでもメールください。



メールでの補足 1 :

「伸ばしたいこと」について、後から思いあたったことが二点あります。インタビューのときは、ドリルとタスクの「兼ね合い」の話から、授業計画について主に述べました。しかし、おそらく時間配分というよりは、目的とタスクのマッチング（のさせ方）の問題の方が大きいのではないかと思います。より詳細な授業計画表をつくるというより、そういう意味での「準備」が課題かと考えます。つまり、どこへ到達するためにどのドリル/タスクをやるのか、どういうキューの出し方をしたらどういう意識を喚起させられるのか etc. をもっと考えることが必要なのかなと。今でも考えていないわけではないのですが（むしろ、そこそそ教員の仕事くらいの気持ちではありますが）、改善の余地は大きいです。

それと、言語学的な観点からの勉強不足が、自分としてのもう一つの（より大きな？）課題です。また名前を出して恐縮ですが、\*\*さんと 4 年間（毎年後期・週 2 回）二人で一緒に一つのクラスを担当していたのですが、彼の文法の説明の仕方、また質問への回答の仕方は、言語学的・文化史的な知見に基づいたものでした。それを見ていて自分でも真似するようになったのですが、自分にはまだまだ知識が足りません。「ドイツ語学」の授業ではないからこうした知見は必要ない、ということは決してなく（もちろん知見を何でもかんでも伝えればいいというのでもなく）、「教科書を読めばわかる」説明以外に言えることがちゃんとある、説明が「わかりやすい」だけでなくそれ自体に発見がある、というのは、巡り巡って「覚える」「使えるようになる」ことに大きく寄与する。このように思います。\*\*先生も FB でよくお書きになっていますが、ドイツ語の運用能力を日々キープして向上させること（学生の発話・作文に対してとっさに判断しないとならない場面も多いし、ある種のロールモデルになる必要もある）と、ドイツ語・英語に関する（主に言語学的な？）知識を得ることは、授業運営について考えることと同じく、教員の大きな課題だと思います。

メールでの補足 2 :

今回、私自身も授業・教員観について話をさせていただける機会となり、ありがたかったです。学内では組織編制上、あるいはその他多くの理由から、外国語教育（ドイツ語教育に限っても）についていろいろな「意見」「立場」があり、頭の痛い状況です。

私は文学が「専門」としながらドイツ語授業を行うことに全く矛盾を感じませんが、日本での「研究」と「外国語教育」の結び方は、やむを得ないところはあるにせよ、問題も多いと感じます。あるいは逆に、さまざまな分野の「専門家」がドイツ語授業を行うのを避けられない現状において、ケアが（うまく）できていない（当人も含めてその必要が感じられていない、機会があってもさまざまな理由で十分に活用されない）とも。

すみません、あと一点だけ追加させてください。教員養成講座に通って「楽になった」と述べましたが、学生たちに任せればよいという意味だけでなく、「机の並べ方一つとって

も、『こうでなければならない』ことなどない、問題は目的と必然性」と思うことができ、解放感を得られた、ということを思い出しました。（「Brunnen」か何かのエッセイに書いたような気がします）